

暗 譜 の 科 学

加藤良一

2003年7月19日

暗譜していたはずの音が出てこない。あれっ、えっ、ああ…と、もたつくうちに曲はどんどん先へと進んでゆく。生涯最大のあたま真っ白状態に陥ったのは、もうずいぶんむかしのこととなった。いまでこそひとごとのように話せるが、その当時はかなりめげたものだった。それは、娘のピアノとのデュオでフルートを吹いたときのことだが、そのことは勇敢にも拙著『音楽は体力です』の冒頭に白状してある。

合唱を楽しむ人のなかにも、暗譜に苦しむ人はけっこういる。かんたんに覚えられる秘訣のようなものがないだろうかと日夜考えているが、どうも王道はないらしい。むしろ、そんなことを考える暇に練習したほうがよいかもしれないが…。

暗譜とはすなわち楽譜の記憶のことだから、脳が記憶をするしくみについて考えてみるのも無駄ではない。

記憶は、その持続時間によって三種類に分けられるという。もっとも時間的に短いのが「感覚記憶」で、目からの情報などのようにイメージとしてそのまま記憶される方式だ。つぎにすこし長いのが「短期記憶」で、数秒から数分間の記憶である。たとえば、暗算や筆算のときに使う繰り上がりなどがこれに当たるが、これが仮にずっと記憶されてしまったら困ったことになる。この種の記憶には、新聞記事を覚えておくような浅い記憶ということで「新聞の記憶」と呼ばれるものがあるが、時間的にはここでいう「短期記憶」よりは少し長そうである。

一番長いのが「長期記憶」で、これは文字どおり長期間持続される記憶。「短期記憶」の中からとくに記憶しておきたいと思ったものがしまわれるものだ。自分の氏名や生年月日などかんたんには忘れないものが「深い記憶」として脳の奥深く収納されている。近ごろの世相として、この「深い記憶」を使うことが減って、ほとんどが何日かすると忘れてしまうような「新聞の記憶」がふえている傾向にあるという。

よく脳味噌のなかに引き出しがあるようにたとえられる。「思い出せない」という状態は、情報の引き出しが開かない状態だ。演奏が終ってステージから降りたらすぐに思

「心は楽しむべし、苦しむべからず。身は労すべし、やすめ過すべからず。」
 どうやら貝原益軒の養生訓じみた結論に導かれてしまった。

Back

[音楽・合唱コーナーTOPへ](#)

[Home](#)

[HOME PAGE](#)へ